

銚子における紀州移民の定着と港町形成に果たした役割

— とくに興野地区の特徴形成と大新旅館を例として —

清水 克志

I はじめに

近世における銚子は、水上交通の結節点であったばかりでなく、醤油醸造業や漁業などの産業も盛んで、複合的な機能を有する関東屈指の港町であった。それは銚子が利根川河口部に立地し、千島海流と日本海流の潮目に位置するなどの地形的な条件に恵まれたことに加え、紀州をはじめとする他所からの来住者が漁業や都市機能の形成に果たした役割が大きかったことによるといわれている。実際、近世期に紀州などの西国先進地から導入された新技術を基盤として発展した醤油醸造業や漁業は、現在も銚子の基幹産業となっている。このように紀州移民¹⁾がもたらした新技術が、現在にもつながる銚子の地域的特徴に大きな影響を与えたことは、疑いようのないことのようにである。

銚子へ新技術をもたらした紀州などからの移民がその後銚子に定着し、町の形成と発展において果たした役割を取り扱った成果としては、ヤマサ醤油を事例として、醤油醸造業の展開や政治活動・社会貢献などを論じた成果などがある²⁾。しかしながら、銚子に定着し港町の形成を担った紀州移民は、後述するように多様な業種に携わっており、これまでの議論をもって必ずしも十分な検討がなされてきたとは言いがたい。紀州移民が銚子の形成に果たした役割を解明するためには、特異な事例のみに着目するのではなく、移民が形成するネットワークなどにも着目しつつ、多種多様な分野での地に着いた活動を検討する必要があると考えられる。

本稿は、以上のような問題意識に立ち、興野地区³⁾において旅館経営を続けてきた紀州移民とそ

の末裔の事績を、新開地である同地区の特徴形成と関わらせて検討するものであり、そのことによって、紀州移民が銚子の発展に果たした役割の一端を明らかにすることを目的とする。事例とする大新旅館は、近世期に紀州移民の子孫が荒野村の利根川河畔（現在は銚子市中央町）に創業し、現在まで存続する銚子の老舗旅館であり、銚子における紀州移民の展開を跡づける上で、格好の事例といえる（第1図および写真1）。大新旅館は近年、高度経済成長期以降に犬吠崎に建設したホ



第1図 調査対象地域
(明治36年5万分の1地形図「銚子」に加筆)

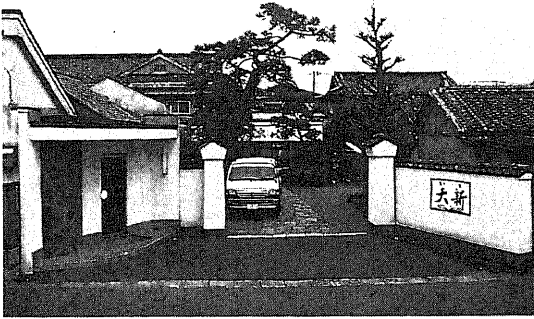


写真1 現在の大新旅館
(2004年12月撮影)

テルニュー大新に経営の中心を移行させつつある。しかしながら大新旅館は、第二次世界大戦時の空襲被害の後に再建された建物が、「古き良き“昭和”の面影を残すノスタルジックな老舗旅館」,「昭和30～40年代の日本の原風景」などと形容され、往時の港町の繁栄ぶりを現在に伝えている。

Ⅱ 荒野村の特徴と紀州移民の定着

1) 荒野村の特徴

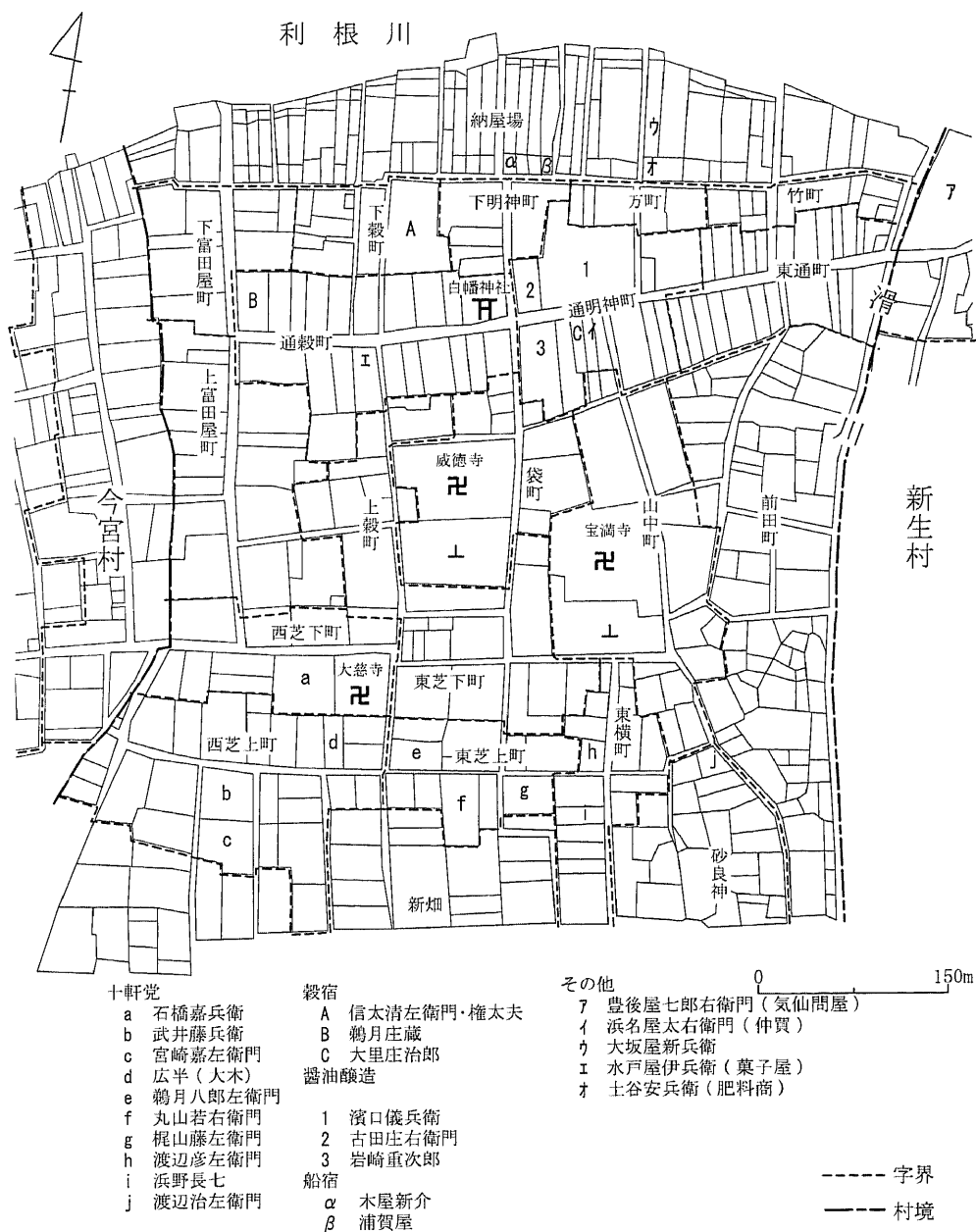
近世期の荒野村については、これまでに船杉・渡辺によって詳細な検討がなされている⁴⁾。ここでは、先学の成果を踏まえつつ、近世期に荒野村が有した特徴についてみておこう。

明治20年(1887)の荒野村地籍図のうち、納屋場・下富田屋町・下穀町・下明神町・万町・竹町・東通町・通明神町・通穀町・上富田屋町・上穀町・袋・山中・前田・東芝横・東芝下・西芝下・東芝上・西芝上の小字が当時町場を形成していた(第2図)。このうち荒野村の鎮守である白幡神社を中心とした東西の道路は、通穀町・通明神町・東通町というふうに、町名に「通」が付されており、短冊状の地割となっている。この道路は、利根川沿岸の集落を結ぶ道であり、飯沼観音へ続く道でもあることから、重要な道路であったと考え

られる。これに対して、下穀町・通穀町・上穀町といった町が南北に列になっていることも注目される。これらの町は東西の道路沿いと比較して地割も大きく、東北地方からの廻米を納める蔵があったと考えられる。また利根川河畔は、短冊状の地割をしており、「納屋場」と称された。これは、漁業移民の来住当初、鰯漁などの漁業目的に利用されたことを示していると考えられるが、18世紀中期頃までには商工業目的に転用されたといわれている⁵⁾。町の南限には大慈寺・威徳寺・宝満寺などの寺院が立地する。これらの寺院のうち、大慈寺(西芝上町、曹洞宗)は宝永元年(1704)の開基と伝えられ⁶⁾、宝満寺(山中町、浄土真宗)は寛永年間(1624～44)に相模国三浦郡三崎町から移転の後、宝永4年(1707)に宝満寺と改称した⁷⁾。船杉・渡辺は、以上のような事実と白幡神社境内に残る庚申塔の碑文から、荒野村で町割が形成された時期を延宝期(1673～81)頃としている⁸⁾。

近世の荒野村の状況を示す史料としては、「銚子領十七ヶ村記録⁹⁾」がある。同史料において荒野村は、「町商人多シ何茂問屋也、銚子第一之町也、小路多シ、旅宿方都而売買ハ此所ニ而専売也、町人も能町人多シ」と記されていることから、問屋街や旅宿を有した流通の拠点であり、港町銚子の核心部を構成していたことがわかる。またこれとほぼ同時期の荒野村の景観は、『下総名勝図会』から読み取ることができる(第3図)。同史料からは、幕末期において、本通りから利根川にかけての一角には屋敷や蔵が立ち並び、船や人の往来が多かった様子がうかがえる。実際、荒野村には、御穀宿¹⁰⁾や気仙問屋¹¹⁾、仲買(穀屋仲間)、船宿といった港町としての機能をもつ業種その他、醤油醸造業者が多数存在していた¹²⁾。これらのうち在所が確認できるものに限れば、本通り沿いには御穀宿や醤油醸造業者が、また納屋場には船宿がある(第2図参照)。

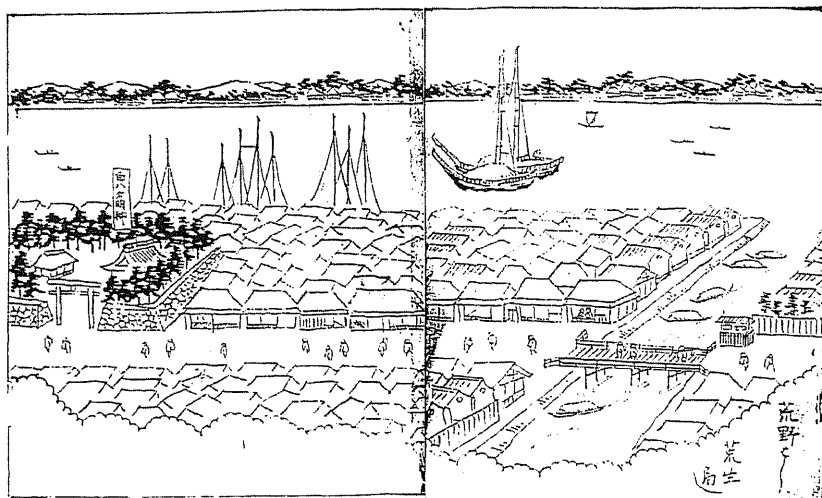
17世紀末期に新たに町立てされた新開地であった点に、荒野村の特徴のひとつを見出すことができるが、それは、銚子が江戸と東北とを結ぶ流通



第2図 荒野村の土地利用－幕末期－
(船杉・渡辺(1998)に加筆)

拠点になっていったことと深く結びついていたと考えられる。次節で示すように、港町の機能を特徴づける業種に携わる者の中に、紀州をはじめとする他所からの移住を類推させる屋号が多く含ま

れている点も、荒野町が開闢地であったこととの関連性をうかがうことができる。



第3図 幕末期の荒野村
(『銚子市史』より抜粋)

2) 紀州移民の定着

正保2年(1645)には広屋儀兵衛(浜口家、ヤマサ)が、宝永5年(1708)には広屋重次郎(岩崎家、ヤマジウ)が紀伊国有田郡広村から荒野村へ移住し醤油醸造業を開始した。宝暦4年(1754)には、飯沼村の有力商家でもあった田中玄蕃(ヒゲタ醤油)を筆頭とし、11軒の醤油醸造家によって銚子醤油組が結成された。これらの醤油醸造家のうち、荒野村に居を構えているものが8軒あり、儀兵衛、重次郎を含めて5軒が広屋を名乗る紀州移民であった。この事実から銚子における醤油醸造業が荒野村を核心地域として展開し、そこに紀州移民が深く関わっていたことがうかがえる。

また、紀伊国有田郡殿村から荒野村へ移住し、納屋場に居を構えて宿屋業に携わった大坂屋新六・新兵衛(垣内家、大新)や、気仙問屋を努めた湯浅屋儀兵衛、広屋儀兵衛の周旋によって通明神町に居を構え、穀屋仲間(仲買)として東北諸藩からの廻米の払い下げなどに携わった浜名屋などの存在も確認できる。このことは、荒野村へ来住した紀州移民が醤油醸造業だけでなく、多様な業種に携わっていたことを示している。

このうち垣内家の祖先については、殿村から二

三男ばかりが5人連れ立って荒野村へ移住して酒造業を行い、後に宿屋ないし料理屋に携わるようになったとの伝承が残っている¹³⁾。しかし、移住の時期や移住当初の状況については、殿村にある檀那寺の過去帳の焼失などあって、詳しいことは分かっていない。18世紀後半において垣内家の当主が初代大坂屋新六(明和元～寛政9年(1764～87))を名乗り、屋号を「大新」としたことが、垣内家に残る家系図から判明する¹⁴⁾。大坂屋では幕末期において、4代目新六(嘉永6年(1853)没)の長男が5代目新六(天保6年(1835)生まれ)を名乗って本家を継ぐ一方、二男の治助が新たに大坂屋新兵衛を名乗り万町に分家を創始した。大新旅館はこれ以降、大坂屋新兵衛家によって経営されることとなった。なお新兵衛家では代数を数える際には初代新六から数え、初代新兵衛を5代目としている。

垣内家の婚姻関係に着目してみると、4代目新六が今宮村三軒町の青物問屋であった八百徳から、5代新六が通町の西川家からそれぞれ妻を迎え、4代新六の2人の娘がそれぞれ万町の肥料問屋であった土谷安兵衛家(角安)と廻船問屋で幕府の御用商人でもあった菊地権三郎家(森権)に嫁いでいる。このことから港町銚子における紀州

移民の定着には、銚子における有力な商家との婚姻による結びつきも重要な要素のひとつであったことが考えられる。

また、幕末期において荒野村が有していた諸機能の担い手として、紀州以外から荒野村へ来住した移民も複数存在したことが船杉・渡辺によって指摘されている。例えば、常陸国の出身で、17世紀末期に通明神町に居を構えて御穀宿となった大里庄治郎家（行方屋）、安房国の出身で、相模国浦賀へ移住の後、18世紀中期に納屋場に再移住して上方筋の廻船宿となった浦賀屋善五郎、豊後国佐伯の出身で、17世紀中期に荒野村と新生村の境界を流れる滑川の東岸に居を構え気仙問屋となった豊後屋七郎右衛門などがこれにあたる。以上のことから荒野村は、近世以降に河岸場として開発された新開地であったために、紀州をはじめとする他所からの移民を受容しやすかったものと考えられる。

3) 文化の結節点としての銚子

近世期に紀州から移住した後、荒野村に定着して現在に至る家のひとつとして、既述したように、大新旅館を経営した垣内新兵衛家が挙げられる。大新旅館に関する幕末期のものと考えられる資料として、「江月楼記」と題された一幅の掛軸の写真が残されている（写真2）。

「江月楼」という楼名は、荒野村の本通りに居を構え、ヤマジユウ醤油を経営する岩崎黍丘（慶応2年（1866）没）が命名した¹⁵⁾。岩崎黍丘は、垣内家と同じく紀州移民であり、俳諧を嗜む文化人としても知られた人物であった¹⁶⁾。

利根川河畔に立地する大新旅館の風情を讃えたとされる「江月楼記」には、「松濤居士作 丁巳陸月 石上大兄囑 東香迂史書」との由来が記されているが、現物の所在が不明で、現時点では、残念ながら、これらの人物を確定することができない。

ところで、川名 登によれば、利根川は近世期における水上交通の幹線帯であり、その流域には豪商や豪農層などの成長が著しく、「下総国学」

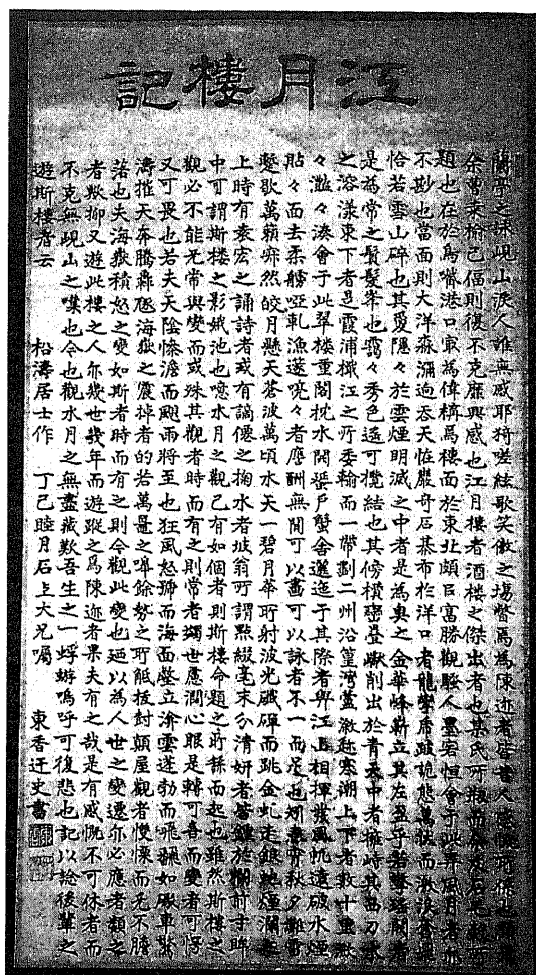


写真2 「江月楼記」
（石上大兄囑）

と呼ばれる、多くの国学者を輩出したという¹⁷⁾。銚子は、その代表的な拠点の一つであった。同書によれば、たとえば、文化13年（1816）に平田篤胤が来銚し、銚子で多くの門人が生まれているが、荒野村に隣接する新生村の石上仁兵衛監通（安政5年（1858）没）は、同村の神明社神主の宮内主水嘉長とともに、平田を出迎え、自宅に逗留させた人物であり、銚子と平田国学との接点となった人物であった¹⁸⁾。「江月楼記」に示されている石上大兄とは、この石上仁兵衛あるいはその近親者を示している可能性がある。また松濤居士

に関しても特定することはできないが、『玄蕃日記¹⁹⁾』文政12年(1829)5月5日条には、清水町の松濤庵において句会が催された記録などがあり、清水町に松濤と称する庵があったことがわかる。それゆえ、松濤居士とは、この松濤庵の庵主など、松濤庵に関わる人物であったことが推測される。このようなことから、ここで示されている丁巳とは、安政4年(1857)と考えられるのではなかろうか。

また、川名 登によれば、利根川河岸布川の医師で『利根川図志』の著者である赤松宗旦も、同じく国学に傾倒した人物であり、執筆の準備や自著の販売などで、何度か銚子を訪れている²⁰⁾。赤松の場合、飯沼観音近くの旅籠屋であった「吉野屋」を根拠にしていたようであるが、親交が深かった人物として、山中五兵衛(干魚商、下穀町)・大野喜平太(画家、ヤマサの並び)・関寛斎(医者、ヤマサの向い)・原宗賢(医者)・文助(文助)などの荒野村の住人が挙げられている²¹⁾。とくに関寛斎は、上総国山辺郡の出身で、安政5年(1858)に来銚して蘭医を開業した人物であるが、赤松が、完成したばかりの『利根川図志』を携え、関を尋ねた逸話などからも分かるように、両者は昵懇の関係であった²²⁾。

このように銚子では、水運による活発な商業活動を通して、多くの豪商が生まれた。彼らの多くは事業欲が旺盛で、生活の余裕がかれらの新知識の導入意欲をかき立てたことが容易に想像できる。そのため銚子は、豪商を中心として、諸国遊歴の文人墨客を快く迎え、彼らへの援助を惜しまない気風が漂い、多くの文化人が集る場所となっていたものと思われる。「江月楼記」は、少なくとも幕末期において、銚子在住の豪商たちが諸国遊歴の文化人たちを接待し、親交を深める場の一つが江月楼であったことを示唆しているものと考えることができよう。

Ⅲ 興野地区の発展と紀州移民の役割

1) 近代における興野地区の景観

a. 明治期

荒野村は、近代に入り明治7年(1874)に興野村と村名表記を変更し、明治22年(1889)には新生・今宮両村と合併して銚子町となった。

明治期の興野地区には、海上郡役所・銚子町役場・警察署・税務署・登記所・郵便局といった行政施設や銀行などの各種金融機関、銚子汽船株式会社・総武線銚子駅といった水陸の輸送交通機関、醤油工場をはじめとする商工業施設などが確認できる(第4図)。

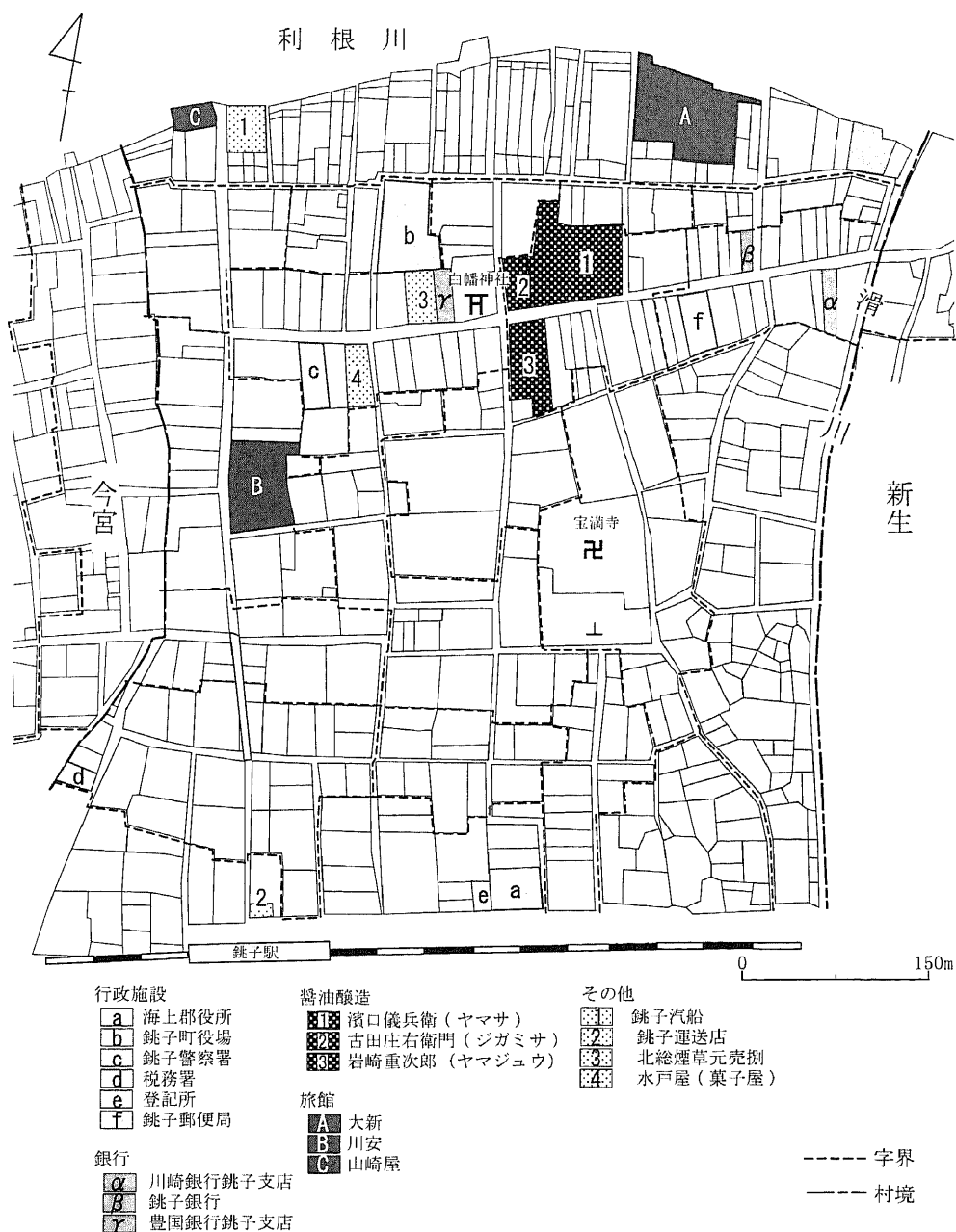
海上郡役所・税務署・登記所は、興野地区南部の農地に新設された。その一方で、銚子町役場は、明治22年(1889)の町村制施行に伴い、御穀宿の一つであった下穀町の信太清左衛門方に、銚子警察署は、通穀町の信太鉄之丞方にそれぞれ設置された。前者は、明治11~17年(1878~84)の一時期、海上郡役所が設置されていた場所でもあった²³⁾。御穀宿は、『海上郡誌²⁴⁾』に「諸藩の廻米の如きは皆当港に寄航せしを以て、一時頗る殷賑を極めしことありしも、維新以後米船寄航全く絶え、商船の出入り次第に減じたり」とあるように、明治期に入り東北地方からの廻米輸送が途絶えたことで、その機能を喪失していたことがうかがえる。しかし、御穀宿の跡地は、広い敷地を必要とする行政施設の設置に好適な場所であった。

銚子汽船株式会社は、明治14年(1881)に浜口儀兵衛を中心とする銚子の有志によって設立され、本社は興野地区の渡船場のたもとに設置された。明治16年(1883)には内国通運株式会社と締結して、東京-銚子間の連絡運輸を開始した²⁵⁾。東京-銚子間以外にも、遅くとも明治末期頃までには、北浦・霞ヶ浦沿岸の高浜・土浦・佐原へ至る航路や江戸崎・水海道・野田・境・古河・笹良橋・川俣などへの乗換接続便が増設されたことから、汽船交通が盛んであったことがうかがえる²⁶⁾。

総武鉄道銚子駅も、銚子汽船と並んで興野地区

の発展を特徴づける施設である。銚子駅は、総武鉄道の終着駅として明治30年（1897）年に興野地区南部に設置され、3年後の明治33年（1900）には新生地区に貨物取扱駅が増設された。総武鉄道

の敷設にあたっては、芝山（現・柴山町）や飯岡（現・海上町）などで敷設反対運動があったことにより難渋したが、本銚子・銚子・西銚子の有力者は、総武鉄道株式会社の設立と開通に対して、



第4図 興野地区の土地利用－明治後期－
（『海上郡誌』、『銚子案内』、『局周辺図』などをもとに作成）

積極的であった²⁷⁾。明治42年(1909)には、銚子駅前に合資会社銚子運送店が営業を開始した。またこの頃までには、すでに大新旅館や川安旅館が銚子駅前に支店を開設し、土産物販売を開始している。このような事実は、銚子駅の開設が興野地区のその後の発展に裨益するところが大きかったとを示していると考えられる。

b. 昭和戦前期

興野地区を含む銚子町は、昭和8年(1933)に本銚子町、西銚子町、豊浦村と合併して銚子市の一部となった。銚子市役所は明治22年(1889)に焼失した威徳寺の跡地を利用して建設された。第5図は、『銚子市商工案内²⁸⁾』主な素材として、昭和戦前期における興野地区の景観を復原したものである。

かつて納屋場と呼ばれた利根川河畔は、河岸通りとも呼ばれた。河岸通り界限には、既述した銚子汽船株式会社があるほか、大新・川安・山崎屋など旅館や芸者屋の存在が目立つ。また米穀商、薪炭や木炭などを扱う燃料商、建材商、倉庫など、水運との関連が深い業種が目立っている。ヤマサをはじめとする醤油醸造業者が醤油を醸造したり、空き瓶を置いたりするための倉庫も多かった。

一方、本通り界限は部分的に倉庫街となっていたり、米穀商や燃料商などが多いという点では、河岸場と共通するものの、醤油醸造業のヤマサや、御穀宿の時代からの有力商人である大里庄治郎商店、安永期(1782～81)創業の老舗菓子屋である水戸屋、明治期に缶詰などの水産加工業を開始した笠上屋などが立ち並ぶ興野地区のメインストリートであった。本通りにはこれらの商店以外にも、銚子郵便局・銚子警察署などの行政施設や千葉貯蓄銀行・豊国銀行・第百銀行銚子支店といった金融機関、呉服店・洋品店・菓子店などの買回り品を取り扱う商店、食堂やカフェが軒を連ねていた。写真3には、昭和10年(1935)前後の本通から利根川にかけての町並みが映されている。画面手前には本通りに面して時計店・履物

店・カフェなどが軒を連ね、その裏手にはこれらの商店よりも高層の倉庫が建ち並んでいる様子がうかがえる。また写真4は、写真3とほぼ同時期の本通りに面した広屋洋品店の店頭を映したものであるが、当時としてはハイカラな洋服が店頭に陳列されている様子から、本通り界限の賑わいを推察することができる。本通りは、昭和戦前期においても、飯沼方面へと連なる繁華街であった。本通りが賑わいをみせる一方で、この時期には銚子駅から北へ延びる駅前通りにも、運送業者や食堂、各種店舗が増加している。駅前通りの整備は、鉄道利用頻度の高まりを示していると考えられる。

この時期における興野地区の変化としては、もう一点、醤油関連施設の増設が挙げられる。興野地区における醤油関連施設の増設は、大正期以降にヤマサ醤油によってなされた。ヤマサ醤油では、大正4年(1915)には、滑川の対岸の新生地区に工場の建設を計画し、大正6年(1917)には、興野地区字砂良神に敷地を購入して第三工場を建設した²⁹⁾。ヤマサ醤油では、これと前後して、明治26年(1893)には隣接するジガミサ醤油を買収して醸造蔵間の壁を撤去して一続きの蔵とした。また大正7年(1918)には、向いのヤマジウ醤油を買収してヤマサ第二工場東蔵とし、銚子醤油株式会社に改組した。大正期以降における醤油醸造業者の再編と施設の大規模化によって、荒野地区の醤油醸造業の町としての性格が一層強まったといえる。

2) 木国会の活動

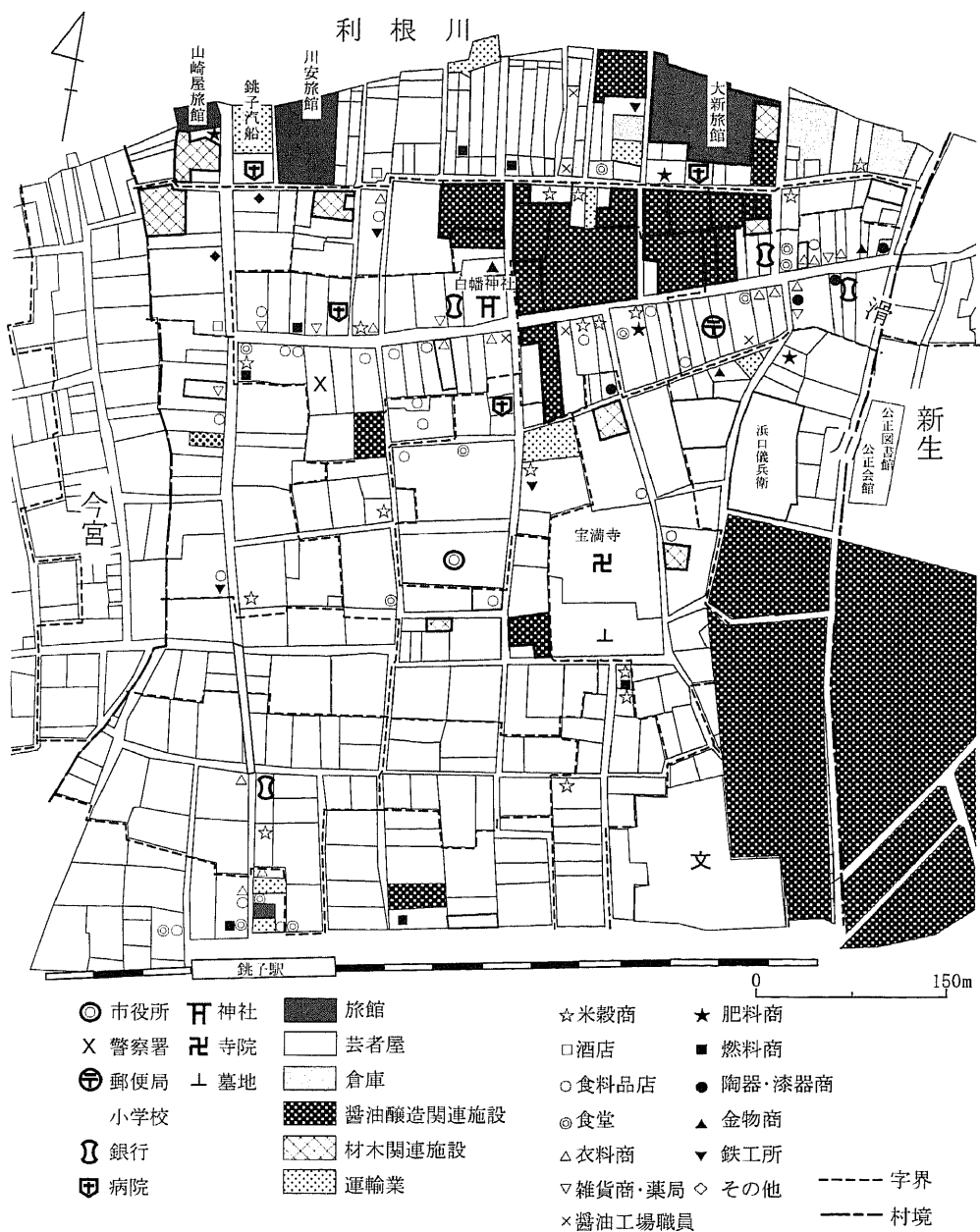
明治31年(1898)には、銚子における紀州移民が先祖を礼拝し、「お互に親睦、業を励ます」目的で、紀州移民の同郷会組織である木国会が結成された³⁰⁾。木国会の創立に尽力した中心人物として、岩崎明岳の名を挙げることができる。岩崎明岳は、ヤマジウ醤油の当主であり、岩崎家が銚子へ移住した紀州人の旅庄屋を勤めたことからわかるように、銚子における紀州移民の中心的人物であった³¹⁾。また書道や茶道への造詣が深い

文化人としても知られる人物でもあった³²⁾。

木国会では、明治36（1903）年には旧紀州藩主徳川茂承に揮毫を依頼し、岩崎明岳が撰書して、以下に示した「紀國人移住碑」を建立した³³⁾。

紀國人移住碑

碑表 紀州旧藩主正二位侯爵 徳川茂承君書
 銚子港原海陬一僻地而致今日之繁盛
 者我紀刻人開創之功為多蓋寛永正保
 之間紀人崎山某等来此地開漁場経営



第5図 興野地区の土地利用－昭和戦前期－
 （『銚子商工案内』および聞き取りをもとに作成）



写真3 昭和戦前期の本通り

(林晃一朗・大木衛 (1984):『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 銚子』, 国書刊行会・p8より抜粋)



写真4 昭和戦前期の広屋洋品店
(大後栄子氏所蔵)

多年其業大振爾來紀人移住日月増加
郷閭多被其利於是商工輻湊戸口繁殖
遂為東海一都会矣徵諸旧聞稽諸遺蹟
紀人率先之功昭乎不可誣也頃我木国
會員相議將立石記其由追想祖先創業
之艱難欲恢弘遺業以報其德也予因叙
其概略勒之碑陰云

明治三十六年五月 銚子木国会長岩崎明
岳撰並書

碑文の概要は、以下の通りである。僻遠の地であった銚子へ、紀州人の崎山某らが寛永・正保期にやってきて漁場を開くことに成功し、その後紀州から銚子へ移住する人が増加した。これをきっかけとして商工業者が各地から集住した結果、銚子港は関東屈指の要港となった。

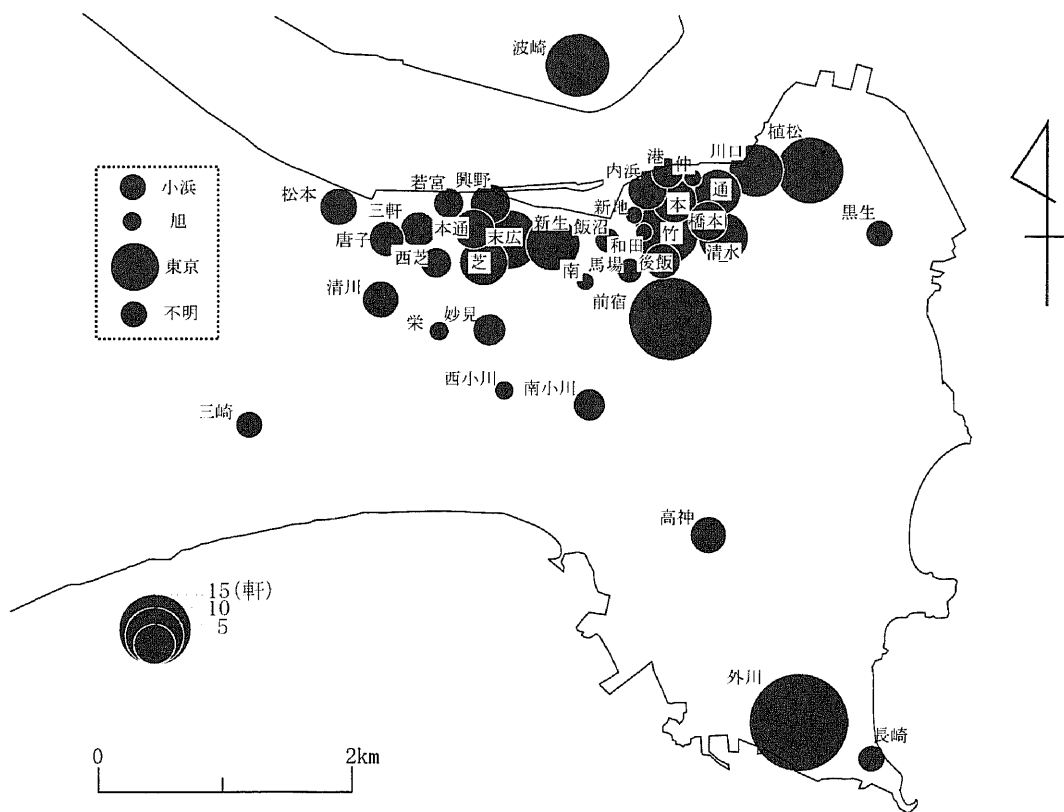
明治30年代に、銚子の発展に対して紀州移民の果たしてきた役割の大きさが、その子孫たちによって確認され、顕彰された事実から、紀州移民とその子孫が、銚子に定住した後も同郷意識を共有しつつ、ネットワークを形成していたことがうかがえる。さらに木国会は、昭和11年(1936)に

は木国会建碑三十五年祭を開催し、『銚子木国会史』を刊行した³⁴⁾。

ところで、木国会員に代表される紀州移民は、明治期以降の港町銚子においてどのような存在であったのであろうか。昭和11年(1936)における木国会員の居住地は、銚子町、本銚子町など銚子市街地に広く分布しているほか、外川をはじめとする高神村の各集落にも分布している(第6図)。会員数から判断する限り、興野地区は、本銚子町よりも少なく高神村とほぼ同数であって、紀州移民がとりわけ多い地域とは言い難い。しかしながら、興野地区に居住する木国会員には、醤油醸造業や建築建材業・料理旅館業・製造業といった比較的大規模な事業主の割合が高い(第1表)。これは、本銚子町や高神村に漁業や小売業従事者の割合が高いことと対照的である。さらに木国会員

からは、貴族院議員(浜口儀兵衛)や衆議院議員(岩崎重次郎)、県会議員(岡本吉兵衛)をはじめ、多くの郡市町村議員や区長などの公職就任者を輩出しており、その中でも興野地区の居住者が目立っている(第2表)³⁵⁾。このことから、興野地区に居住する木国会員は、木国会の中でも重要な地位を占めていたことがうかがえる。実際、木国会員は、明治期においても銚子汽船株式会社の設立に寄与したり、あるいは総武鉄道会社の設立に際しても大きな役割を果たした。後者の建立に際して、銚港神社に石灯籠が寄進されたが、その中には以下の銚子町在住者が名前を列ねている³⁶⁾。

浜口儀兵衛・岩崎重^マ二郎・山口文右衛門・山口文次郎・岡田源吉・飯田朝次・武内国二郎・加川



第6図 木国会の町丁別会員数－昭和11年(1936)－
(『銚子木国会史』により作成)

第1表 木国会会員の業種構成
—昭和11年（1936）—

業種	銚子町			本銚子町	高神村	豊岡村	茨城県波崎町
	興野	今宮	新生				
米穀商	4			3	1		1
食料品商	1	2		13	3		1
雑貨商	1		1	6	1	2	
燃料商	3						
肥料商				1	2		1
水産加工業				10	1	2	5
製造業	6	3	3	6		1	1
衣類・履物商	4	1		5	1		
醤油醸造業	1	1					
旅館・料理業	2		1	1		1	
運輸業	1	1		3	1		
建築土木業	6			7			
造船業				4	2		
農業				2	1		3
漁業		2		13	3	4	5
会社員・吏員	5	2	1	3			
その他・不明	2	6	4	13	19	3	1
計	36	18	10	90	35	13	18

（『銚子木国会史』により作成）

第2表 木国会会員による公職就任
—昭和11年（1936）以前—

公職名	氏名	所在地
貴族院議員	濱口儀兵衛	興野
衆議院議員	濱口吉兵衛	今宮
	岩崎重次郎	興野
県会議員	小野田周斎	今宮
	岡本吉兵衛	興野
	竹中広次郎	(不明)
郡会議員	瓦林留五郎	飯沼
	戸木治三郎	高神
	石川重郎	波崎
市会議員	樋口忠兵衛	興野
	宮内安蔵	新生
町村会議員	岩崎長三	新生
	内山寅之助	今宮
	原 正蔵	飯沼
	宮内七兵衛	豊岡
	青柳永吉	高神
	楠本善次	(不明)
	伊藤長左衛門	高神

（『銚子木国会史』により作成）

卯之助・田中常右衛門・千年政七・熱田藤助・岩瀬利右衛門・土田万蔵・塚原新吉・黒田修平・岡本吉兵衛・岡本国太郎・久世孝兵衛・竹内五太夫・林与一郎・高木五郎左衛門・伊藤徳次郎・垣内新兵衛・松本徳太郎・馬場醤油方・大政・川安（下線は筆者，木国会会員を示す）

木国会会員がかなりの割合を占めるばかりでなく，浜口儀兵衛と岩崎重次郎の名前が筆頭に置かれていることなどから，木国会会員が港町銚子の形成において重要な位置を占めていたことがうかがえる。

3）紀州移民による旅館経営

a. 垣内新兵衛家と大新旅館

大新旅館の経営は，近代以降，儀助（6代目），政次（7代目），治三郎（8代目），政治（9代目）へと引き継がれた。紀州移民を祖先とする垣内家は，明治31年（1898）の木国会創設の際に3円の創設費を出費している。これは浜口儀兵衛，岩崎重次郎の各7円，岡本吉兵衛，岡本與一郎，岡本庫太郎の各4円に次ぐ金額である。また昭和11年（1936）当時，垣内新兵衛は木国会の役員を務め，『木国会沿革史』の編集係を担当するとともに，役員会会場として大新旅館を提供するなど，木国会内で中心的な役割を担っていた。

大新旅館は，利根川に面して河岸場独特の風情を有する場所に立地していた（第5図）。昭和初頭に護岸工事が行われる以前は，大新旅館の北側の利根川河畔はなぎさであった。なぎさには飛び込み台が設置され夏季の水浴場として利用されたほか，しじみ漁や投網漁などの内水面漁業も盛んであったといわれている³⁷⁾。写真5は，第二次世界大戦以前の大新旅館の写真である。また第7図と第8図は，同じく第二次世界大戦以前の大新旅館の絵葉書である。大新旅館の高楼（江月楼）からの眺めを描いた第7図からは，対岸の波崎を背にして利根川の川面に帆船や高瀬船が浮かぶ情景を読み取ることができる。また利根川から大新旅館を眺めた第8図からは利根川河畔がなぎさで

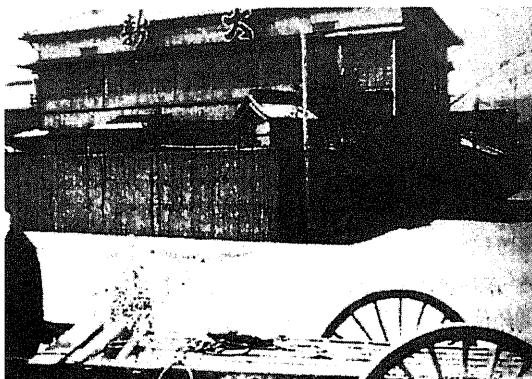
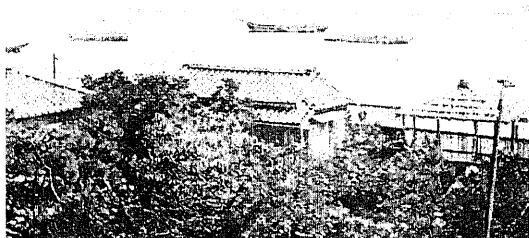


写真5 昭和戦前期の大新旅館
(三田漕艇倶楽部百周年事業委員会
(1989):『百年のあゆみ』, 慶応大学体育
会端漕部三田漕艇倶楽部・p396より抜
粋)



第7図 大新旅館からの眺望
(大里健編著(1999):『古きを訪ねる銚子
の絵はがき』, 東京文献・p109より抜粋)



第8図 大新旅館の遠景
(大里健編著(1999):『古きを訪ねる銚子
の絵はがき』, 東京文献・p108より抜粋)

あったことが確認できるとともに大新旅館の高楼が周辺の建物より一段高くなっていること、大新旅館付近でヨットやボートを浮かべて遊ぶ人々の存在などが確認できる。

b. 近代における大新旅館の経営

大新旅館の7代目政次は、明治末期に刊行された『房総人名辞典³⁸⁾』に、「明治25年先代新兵衛の死後、現主専ら家業に励みて、江湖の愛顧愈々加わり」とあることから、大新旅館の経営に精励し発展させた人物であった。この記事以外にも、7代目政次は、宝満寺に先々代と先代の墓を建立しており、彼が大新旅館の中興に果たした役割が大きかったことが推察される。

7代目政次の時代には、小松宮殿下や閑院宮殿下、徳川慶喜といった皇族や華族、伊藤博文・山縣有朋・大山巖・西郷従道・大隈重信・後藤新平など中央政府の要人、島崎藤村や竹久夢二・黒田清輝・徳富蘆花といった文人など、著名な人物が大新旅館へ多数来泊したと伝えられている³⁹⁾。

利根川河畔の風情がある地に建つ大新旅館は、島崎藤村が「利根川が大海に流れ込むところを一目見たい」といって明治31年(1998)に大新旅館に逗留したこと⁴⁰⁾や、吉田弦二郎(小説家、1886～1956)が『犬吠崎紀行』の中で「大利根の流れに臨んで大新の座敷がある。遙かに鹿島灘の白波を眺め、大利根の蒼然たるを一時に容る^{いちぼう}⁴¹⁾」と記述していることからわかるように、利根川が太平洋へ合流する絶景は、当代一流の文学者たちの心を駆り立てた。この絶景を当時の大新旅館から一望することができたことがわかる。また先述した『房総人名辞典』には、

大新の料理は滋養を以て知られ、都人士の嗜好に適ふ。(略)庭内別に二棟の離亭あり。『淡路』『松島』と呼ぶこれ岩崎明岳^{しょうしや}の命する処なり。構造大なるにあらねど、瀟洒風流にして雅致あり

とある。このことは、大新旅館で出される料理や

建物自体の構造が、河畔の風情とあいまって、東京から訪れる上流階級の人々や文士達を満足させるほどに洗練されていたことを示している。さらに徳川慶喜が晩年に大新旅館を訪れた際、宴の席で7代目政次が自ら慶喜の仕舞いの相手をしたというエピソードが残っており、当主である7代目政次自身の教養の高さもうかがわれる。垣内家は、とりわけ7代目政次の時代にヤマジウ醤油の経営者である岩崎家との関係を深めたといわれているが⁴²⁾、『房総人名辞典』の記述やこれらの事実からは、岩崎家と垣内家の関係が、単に業務上の取引相手としての側面だけでなく、教養人同士の文化的な交流という側面をも含んでいたことが推測される。

大正期には、銚子出身の国語学者で『大日本国語辞典』の編纂者として知られる、松井簡治もまた、友人や知人を大新旅館へ招き、宴会を催した思い出を手記に残している⁴³⁾。松井簡治の父である宮内嘉確は、前出の宮内嘉長の養子で、赤松宗旦とも親交が深く、高崎藩士の子弟らが通う私塾を開いていた人物である。松井簡治が大新旅館に招いた人物とは、上田萬年・和田英松・芳賀矢一であり、いずれも著名な国語学者である。手記によれば、この時松井簡治ら一行は、江月樓の樓名にちなんで、「江」を上田萬年、「上」を和田英松、「月」を芳賀矢一、「清」を松井簡治が、横額に各1文字ずつ揮毫した。この「江上月清」と書かれた横額は、戦災によって消失してしまったため現存はしないが、松井が手記を書いた昭和13年(1938)当時には、大新旅館に掛けられていた。この逸話は、銚子ゆかりの教養人が、知人を銚子へ招き、大新旅館を交歓の場としたという点で、幕末期の「江月樓記」をめぐる逸話との共通点が指摘できる。

一方、大正から昭和戦前期にかけてヤマサ醤油に勤務し、大新旅館を利用することも多かった外岡松五郎の手記⁴⁴⁾によれば、大新旅館は、関東大震災以前頃までは、銚子の醤油組合が毎年1月15日に開催する招待会の会場としても利用された。この招待会は、東京などに居を構え、銚子を留守

にすることが多い醤油会社の経営者たちが、海上郡長以下、銚子・本銚子・西銚子の各町長や各種学校長・税務署長・警察署長・駅長・灯台長・測候所長・郵便局長・銀行支店長などを招待して平素の疎遠を詫び、お礼をする会で、通称「長会」とも呼ばれたという。また、東京の醤油問屋が、新年の挨拶に来銚した際には、ヤマサ・ヒゲタ・ヤマジウなど、銚子の醤油組合の主だった者が、銚子駅まで出迎え、暁鶏館で一泊することが通例となっていたが、その際にも、必ず大新旅館と川安旅館が昼食会場として利用された。大新旅館は、醤油醸造業者が賓客をもてなす場としての役割をも担っていた。写真6は、第二次世界大戦以前の銚子駅において撮影されたと思われる絵葉書である。銚子駅のホームに大新旅館をはじめ、川安旅館・銚子館・暁鶏館など、当時の銚子における主要な旅館の関係者や、正装をした人物が多数見受けられることから、上述のような催し事の際に撮影されたものと思われる。

第二次世界大戦以前の大新旅館では、料理人や女中、下足番などを含め40人ほどの使用人を雇用していた。当時の大新旅館は、現社長である綾子氏の言葉を借りるまでもなく、銚子の外からの要人を迎える「迎賓館」であり、銚子の旦那衆の「社交場」としての役割を果たしていたといえる。大新旅館の役割は、立地環境はいうに及ばず、河畔の風情や情趣に富んだ建物の構造、当主の素養や品格が結びついて初めて果たし得たといえよう。

7代目政次の死後、大新旅館の経営は、8代目治三郎、9代目政治へと引き継がれた。8代目治三郎は本通りの老舗の菓子屋である豊田伊兵衛家(水戸屋)から、9代目政治は今宮町の名主を勤めた山口三郎左衛門家からそれぞれ妻を迎えている。今宮町の山口家は、鎌倉期に現在の若宮神社のご神体を携えてやってきたという伝承を持つ旧家である。9代目政治の妻であり、綾子氏らの母である八重氏は、開学間もない銚子女学校を卒業した後、東京青山の岩崎重次郎家へ行儀見習いに出たことをきっかけに、岩崎家の大番頭の仲介に

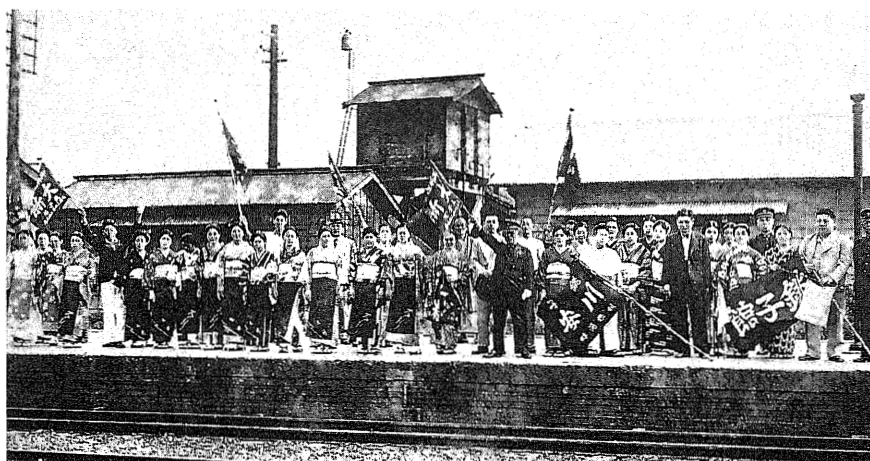


写真6 銚子駅ホームでの賓客接待
(大新旅館所蔵)

よって垣内家へ嫁いだ。

近代における興野地区は、水運、鉄道の両方の拠点を有する銚子の核心部分であった。紀州移民の末裔である大新旅館は、利根川河畔の風情ある旅館として、銚子を訪れる賓客をもてなす場としての役割を果たす一方、木国会を通じて岩崎らと関係を深めたり在来の商家とのネットワークを拡げることによって、銚子での事業において確固たる地位を築いてきた。

Ⅳ 第二次世界大戦以降の大新旅館

1) 戦災復興から事業の拡大へ

昭和20年(1945)3月9日から10日にかけて、かつての市役所付近と末広町が空襲を受けて、駅前通りおよび市役所を中心とした区域が焼失した。さらに同年7月19日から20日にかけて市街地の外郭から中心部にかけて再度空襲を受けて、市街地のほとんどが焦土と化した⁴⁵⁾。これらの空襲によって、興野地区のほぼ全域が罹災した⁴⁶⁾。空襲による市街地の荒廃が著しかった銚子市では、国の「戦災地復興計画基本方針」に基づく5か年計画事業の事業区域として指定を受け、戦災復興事業が実施された⁴⁷⁾。その結果興野地区では、土地区画が大幅に改変され、駅前通り・本通り・海岸

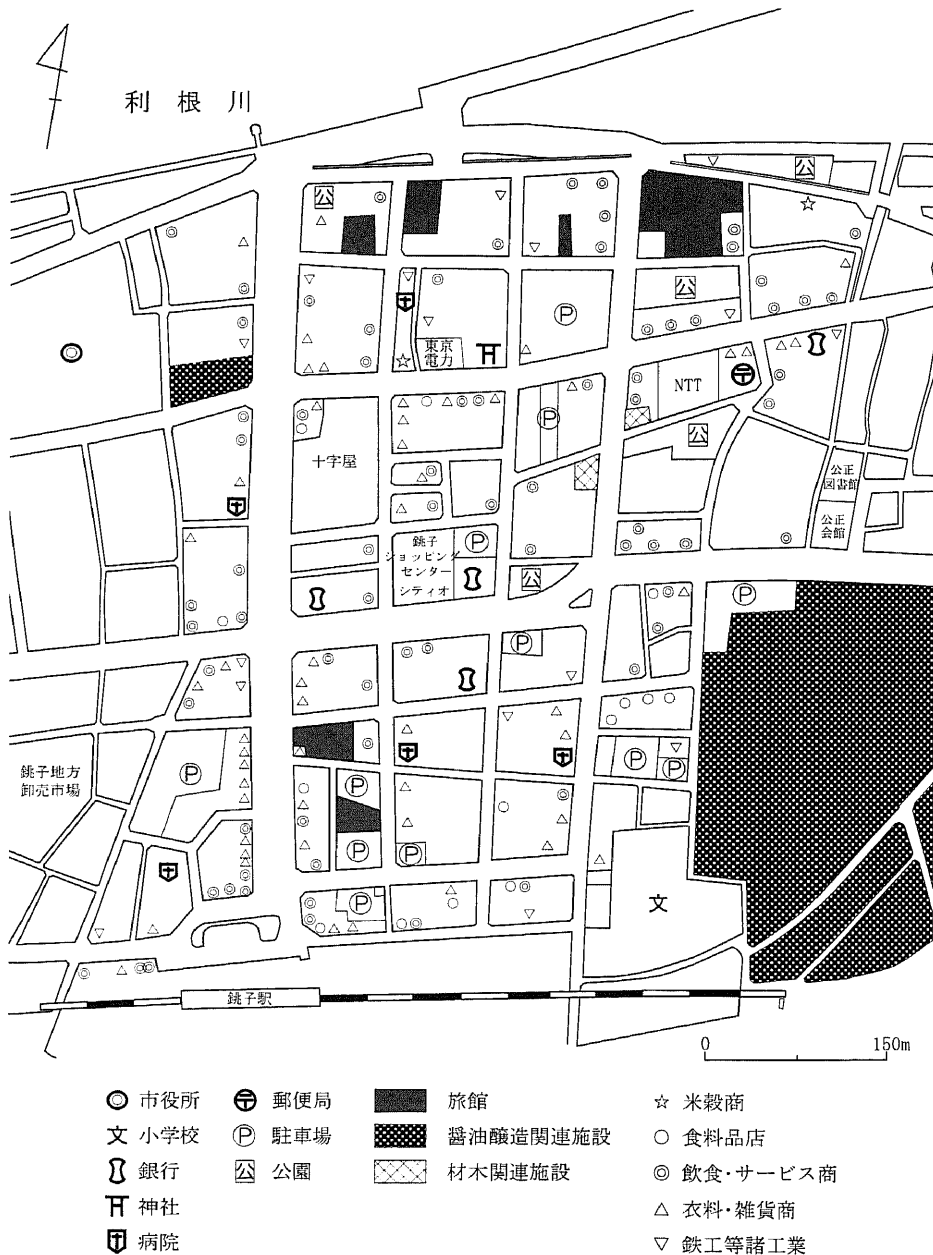
道路などの大幅な幅員拡張がなされるとともに、新たに主要地方道銚子停車場線・県道外川港線が増設された(第9図)。このように戦災復興事業によって興野地区の景観は大きく変化した⁴⁸⁾。

近年の興野地区の土地利用をみると、十字屋と銚子ショッピングセンターという2つの大型店舗や駐車場・公園などの存在が目立つ。十字屋と銚子ショッピングセンターは、それぞれ昭和51年(1976)と昭和54年(1979)に双葉町に開店した。十字屋はかつてのタカラ醤油の工場跡地に建設された。また十字屋の駐車場はヤマサ醤油工場の跡地が利用された。一方のシティオは、昭和50年(1975)に若宮町への銚子市役所の移転に伴い、その跡地が利用された。井上ほかは、近年興野地区にこのような大型店舗が開店したことや、その後新興の商店街が形成されたことによって、銚子における商業の中心地域が飯沼・新生地区から、興野地区へ移動しつつあることを指摘している⁴⁹⁾。興野地区の大型店舗や駐車場の多くは、古くは新開地に造成された御穀宿や醤油醸造蔵などとして、また近代以降には行政施設としても利用されたような、比較的大きな土地区画に建設されている。このような歴史的過程の延長上に、今日における興野地区の商業地域としての特徴が形成されたといえる。

大新旅館も、昭和20年（1945）の空襲によって、その大部分を消失した。大新旅館では、女中2人を残して、それ以外の従業員を実家に帰し、空襲の被害を免れた建物のみで旅館営業を続け

た。その間垣内家の家族は、2人の女中とともに焼け残った離れで暮らした。

大新旅館では、昭和23年（1948）頃には現在本館と呼ばれている部分を再建した。これによって



第9図 興野地区の土地利用－現代－

（「ゼンリン住宅地図'96」，聞き取りおよび現地調査により作成）

玄関の向きも、戦前の西向きから南向きへと変わった。玄関の脇にはサロンを設け、外国人を雇って営業した。昭和29年（1954）には別館を新築した。当初は別館を3階建てにしようという意見もあったが、当時の暖房は火鉢であり、火鉢の始末に3階まで行き来する大変さを考慮して2階建てとした。また、昭和44年（1969）から翌年にかけて、庭が一望できる大浴場や、テーブルと椅子で食事ができるグリルを造成した。

また大新旅館は、昭和29（1954）には犬吠崎に敷地（後のニュー大新）を購入し、植樹を開始した。その背景としては、大新旅館北側の利根川河畔の護岸工事が行われ、道路が整備されたことによって、銚子漁港を利用するトラックが頻繁に通るようになり、かつての河畔の風情が失われつつあったことがあるといわれている。また垣内家の親戚でもある土谷家が犬吠崎で経営していた暁鷄館が、季節営業から周年営業へ移行したことも、大新旅館の犬吠崎への進出にあたっては参考となった。このように大新旅館の犬吠崎への事業拡大の意思決定には、犬吠崎の観光開発の進展だけでなく、先に述べた興野地区における道路網の整備や交通量の増加に伴う利根川河畔の風情の消失などが深く関わっていた。

犬吠崎にニュー大新が建設されたのは敷地を購入してから10年後の昭和39年（1964）のことである。これは東京オリンピックに向けて政府が行った融資によるところが大きかった。ニュー大新は、平成元年（1989）に地上7階地下1階建てのホテルへと増築された。当時企業や農協などの団体旅行や宴会が多かったこと、それまで犬吠崎の波濤が一望できたニュー大新の近隣にホテルが建設され、眺望が損なわれたことなどが増築の理由であった。近年ニュー大新は、平成13年（2001）に天然温泉が敷設されるなど、犬吠崎において、前出の暁鷄館や京成ホテルなどとともに主要な位置を占めている。

大新旅館の事業の拡大として、もうひとつ昭和30年代に両国駅前に東京案内所を兼ねた旅館を建設したことが挙げられる。最初は日本料理の板前

を雇って料理を出していたが振るわず、素泊まりが主となった。しかし東京の大新旅館は、築地市場に近いので、銚子では入手困難な食材や刺身のつま物などを仕入れて大新旅館やニュー大新へ調達する拠点として、あるいは垣内家やその近親の子弟が東京の大学へ通う際の下宿としての役割を果たした。

綾子氏らの父である9代目政治が昭和24年（1949）に亡くなった後、大新旅館のこのような事業拡大を推進したのは綾子氏の母八重氏と兄善次郎氏であった。善次郎氏は幼少から病弱であったため、旅館の実務に携わることはできなかったが、旅館業経営を学び、日本各地の人気旅館を訪れて記録や写真を残し、大新旅館の経営の参考にしたといわれている。綾子氏は、就学を終え昭和33年（1958）に大内家に嫁いだ後、八重氏に子守りをしてもらいつつ、旅館業を手伝った。

2) 大新旅館の経営の多角化

第二次世界大戦後、大新旅館を取り巻く環境が大きく変化した。しかし昭和39年（1964）には善次郎氏が木国会の役員に就任したことや、近年においても、木国会の役員会をほぼ毎年、大新旅館で開催していることなどから、大新旅館が木国会の中で重要な位置にあり続けていることがうかがえる。第二次世界大戦後には、年代は不詳であるが、高松宮殿下夫妻（写真7）が、昭和42年（1967）には、常陸宮殿下夫妻（写真8）が、大新旅館を訪れている。大新旅館は、第二次世界大戦後も、銚子の老舗旅館としての地位を保持してきた。昭和60年（1985）に放映されたNHK朝の連続テレビ小説「渚つくし」の記者会見や会合は、犬吠崎のホテルニュー大新で行われた。このことは、大新旅館の「迎賓館」としての機能が、ニュー大新に引き継がれたことを示しているものと考えられる。

さらに第二次世界大戦後の大新旅館の経営においては、観光客を目的とするばかりではなく、利用者の多様なニーズへの対応も確認できる。

昭和35年（1960）の鹿島灘沿岸地域総合開発の



写真7 高松宮夫妻の来訪
(大新旅館所蔵)



写真8 常陸宮夫妻の来訪
(大新旅館所蔵)

構想作成に端を発する鹿島臨海工業地帯の開発は、昭和38年（1963）の鹿島港の起工式以降本格的に着手された。当時銚子地域は、昭和37年（1962）の銚子大橋開通によって、利根川対岸の鹿島地域と自動車での往来が可能になっていた。銚子地域の農家や漁家は、鹿島開発に対して少なからぬ労働力の供給源となったといわれており、銚子地域では、その状況を「鹿島景気」と呼んでいる。

鹿島開発の際に雇用された、外国人技師のうち22人が、1年半の工事期間中、大新旅館に滞在した。彼らはアメリカ合衆国の企業に所属する技術

者であったが、アメリカ人のほか、イギリス人やノルウェー人、インド人もおり、家族連れのものも含まれていた。外国人技師の滞在地として大新旅館が選定された理由としては、大新旅館が銚子大橋の近くに立地し、鹿島への通勤が容易であったことは言うまでもない。しかしそれに加えて、この当時大新旅館では、日本料理の板前だけでなく、洋食のコックも恒常的に雇用しており、外国人技師への食事の提供が可能であったことも、もう1つの理由として挙げられる。外国人技師専用洋食のメニューを用意し、朝晩は、一人一人の好みを聞いて、料理を提供した。また彼らが毎朝タクシーで鹿島へ出勤する際には、サンドイッチ弁当を持たせた。当時、日本では入手場所が限られていたデルモンテのジュースなどは、東京の明治屋で購入したという。大新旅館内のサロンを利用して夜のダンスパーティーがしばしば催された。

大新旅館は、近隣の商家が結婚式などの宴会に利用する施設でもあった。そのため大新旅館には戦前から150人規模の宴会が可能な100畳の大広間を設けてあった。戦後の修築の際にも、このような需要に応じるため、100畳の大広間を再建した。このような大広間をもった旅館は、銚子では大新旅館以外にはなかったといわれている。大新旅館では、結婚式には、座敷の真ん中に緋毛氈を敷き、新郎新婦が座る上座も豪華に飾ったといわれている。高度経済成長期以前には、結婚式は秋の夜に行なわれることが多かったが、綾子氏によれば、秋には結婚式、12月には忘年会、1月には新年会と、都合のよいサイクルで大広間が利用されていたといわれる。昭和50年代に入ると日本間に正座することを嫌う人が多くなったため、椅子とテーブルを購入して対応した。その後、銚子周辺においても結婚式場やブライダルハウスを併設するホテルが増え始めたことにより、昭和50年代を最後に、大新旅館を結婚式場として利用する人はいなくなった。

大学漕艇部の合宿場として、長年にわたって利用され続けて来たことも、大新旅館の特徴といえ

る。漕艇部の合宿場としての大新旅館の利用は、明治21年（1888）に慶応義塾大学ボート部が利用したことに始まる。7代目政次は、「この学生さん達こそが新しい時代の担い手である」と考え、特に手厚く遇したといわれている⁵⁰⁾。利根川の護岸工事がなされる以前は、なぎさから大新旅館の庭へ直接ボートを曳き上げることができた。また護岸工事の際にも、岸壁の一部に幅三尺の石段を設けて、ボートをすぐに大新旅館の門へ入れられるよう配慮した。大新旅館の庭は昭和20年代半ばまでボートの艇庫としても利用された。漕艇部が銚子を出発する朝には、綾子氏らが夜中に起きて、1人3個ずつ50人分ものおにぎりを握って持たせたという。昭和13年（1938）に銚子遠航を経験した慶応大学漕艇部員の手記⁵¹⁾には、

夕方早目に銚子につき岸壁近くの旅館大新につく。7日の夜は陸路やってきた先輩たちとも合流して全くの無礼講、宿の主人の歓待もあり、その盛り上がりようは大変なものでした

とある。また、前出の外岡松五郎の手記⁵²⁾にも、

東京のボートメンなどが遠漕して来て、二階の旧館で一と晩中飲みさわいでいても、笑って見のがしていた。その当時、一ツ橋のボート部に、遠漕の歌があった（略）“十と出たわいヨサホイノホイ、遠い船出をつつがなく、今宵、大新、飲みあかす”（略）畢竟、大新の寛容と厚遇の賜である

とある。これらのことから合宿場として大新旅館を利用した学生に対する「主人の歓待」ぶりが、利用客に深い印象を与えるほどのものであったことを示している。

大新旅館が大学生の合宿を受け入れ、彼らを厚遇したことは、当時の大学生の地位が現在と比べても相当高いものであったとはいえ、政府高官や軍人を出す旅館としての側面とはまた違った一面をもっていたといえよう。

第二次世界大戦後、興野地区の景観が大きく変化する中で、大新旅館を取り巻く環境も一変した。そのような状況の中で大新旅館では、時代ごとに変化する利用者のニーズに対応した経営の多角化を図って存続してきたといえる。

V おわりに

以上、港町銚子における紀州移民の定着と、その後の港町形成に果たした役割について、とくに興野地区と、この地区内にある大新旅館を事例として考察してきた。

興野地区は、漁業移民の来住によって当初納屋場として開発された。18世紀以降には、利根川舟運の発達とともに港町としての整備が進み、御穀宿や廻船問屋の蔵が林立し、船宿も多数立地する景観を呈した。近代に入って米の中継拠点としての機能が弱まると、興野地区は、米蔵の跡地などを利用して各種の行政施設が立地し、官庁街としての性格を持つようになった。また興野地区は近世・近代を通じて、ヤマサ醤油をはじめとする、醤油醸造蔵が立地する醤油醸造の町でもあった。

紀州移民とその子孫によって構成される木国会の分析からは、紀州移民の子孫が銚子において、醤油醸造業をはじめ多様な業種に携わっていることや、国会議員や県議会議員をはじめ多くの政治家を輩出していることが確認され、紀州移民の子孫が銚子において重要な位置を占めていたことが明らかとなった。とくに興野地区は、新開地であったこともあり、ヤマサ醤油の経営者である濱口氏やヤマジユウ醤油の経営者である岩崎氏らに代表されるように、銚子の中でも事業欲が強い紀州移民が多く定着した地区であった。

大新旅館の経営者である垣内家も、紀州移民を先祖とする家のひとつである。垣内家の祖先は、紀州から移住して荒野村に居を構えた当初は酒造業を営み、後に旅館業ないし料理業に転業したという伝承をもつ、銚子における紀州移民の典型的な事例のひとつである。垣内家は、紀州移民の旅庄屋であり木国会の初代会長でもあったヤマジユ

ウ醤油の当主に旅館の高樓、離亭を命名してもらうなど、岩崎家と昵懇の間柄であった。また垣内家の当主は、木国会の役員を務め、木国会の役員会や醤油醸造業者の定例会の会場として旅館を提供するなど、木国会内において大きな役割を果たしてきた。銚子では、木国会をひとつの紐帯とした紀州移民の子孫による相互のネットワークが、近代に至ってより強固に確認された。しかし、幕末～近代において垣内家が、近世以前から銚子に居住していたとされる旧家や、紀州以外からの他所出身者と婚姻関係を結んでいることからわかるように、紀州移民が銚子において閉鎖的な独自の社会を形成していたのではなく、紀州移民以外の人々とも人的ネットワークを深めつつ、町の形成の一翼を担ってきたと解釈するほうが妥当であろう。

一方、近代以降の大新旅館の経営や利用の実態に着目すると、以下のことが明らかとなった。大新旅館は利根川河畔の河岸場に立地し、眺望もよかったことから、皇族・華族・政府高官や文人墨客などが頻繁に来訪する港町銚子の「迎賓館」的な役割を果たした。しかし、大新旅館が港町銚子の「迎賓館」となるためには、立地上の好条件に加え、経営者である垣内家の当主やその他の紀州移民を含めた港町銚子の旦那衆が、ふだんから大新旅館を「社交場」として利用していたことも重要であったと考えられる。

昭和初期の利根川の護岸工事や第二次世界地戦後の道路網の整備によって、大新旅館周辺の景観が変化し河畔の風情を喪失すると、結婚式場やサロン、グリルなどを増設したり、新たな観光拠点である犬吠崎へ進出するなどの事業の拡大が図られた。このような事業の拡大によって、大新旅館は、第二次世界大戦後においても「迎賓館」としての地位を保持するばかりでなく、鹿島開発のための外国人技師の滞在地、結婚式場として、あるいは明治期から一貫して大学漕艇部の合宿地などとして利用され、時代の変化に対応しつつ経営の多角化を図って存続してきた。

大新旅館の事例は、ヤマサやヤマジユウ醤油な

どとともに、紀州をはじめとする他所から銚子の新開地である荒野村への移住の後に定着して、銚子の発展に多大な寄与をなした恰好の事例であると考えられる。

付 記

本稿の作成にあたり、大新旅館社長の大内綾子氏には、資料の提供や調査の便宜のほか、多くのご教示を賜りました。銚子市公正図書館の高森良文氏と銚子市文化財審議委員の永澤謹吾氏には多くの助言を頂きました。現地調査においては、銚子市興野地区の大里庄治郎氏、大後栄子氏、同市君ヶ浜の井橋悟郎氏にご協力を頂きました。また、原稿の執筆にあたっては、筑波大学人文社会科学部研究科の山澤 学先生にご助言を頂きました。そのほか、図表の作成には、筑波大学人文学部の井上貴智氏にご協力頂きました。以上ここに記して厚くお礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 移民とは、他地域から移住してきた個人や集団そのものを意味する語であるが、本稿では、銚子在来の住民およびその子孫と区別するため、銚子への移住第一世代だけでなく、これらの子孫も含めて移民と呼ぶこととする。
- 2) 湯澤規子・高橋珠州彦（2004）：「公正会」による民間社会教育事業と銚子の近代化におけるその意義、歴史地理調査報告，11，15～32。
- 3) 現在、興野（荒野）地区という名称は存在しないが、本稿では近世の荒野村の範囲を荒野地区と表記することとする。明治7年（1874）に荒野から興野へ村名の表記が変わるため、本稿では明治期以降については興野と表記する。
- 4) 舩杉力修・渡辺康代（1998）：港町銚子の機能とその変容－荒野地区を中心として－，歴史地理学調査報告，8，1～31。
- 5) 千葉県海上郡教育会編・発行（1917）：『海上郡誌』，460～461。
- 6) 前掲5），1063ページ。
- 7) 前掲5），1072～1073。
- 8) 前掲4），7～9。
- 9) 船橋市西図書館所蔵「下総国海上郡銚子御領分拾七ヶ村記録」。
- 10) 仙台藩、米沢藩、磐城平藩などの東北諸藩の廻米を取り扱う問屋のことをいう。

- 11) 東北地方の廻米以外の商荷物を取り扱う問屋のことをいう。
- 12) 前掲4), 10~15。
- 13) 大内綾子氏のご教示による。
- 14) 大内綾子氏のご提供による。
- 15) 千葉毎日新聞社編・発行 (1909):『房総人名辞典』。
- 16) 銚子市史編纂委員会編・発行、『銚子市史』, 850~851。
- 17) 川名 登 (1993):『河川水運の文化史 江戸文化と利根川文化圏』, 雄山閣, 274ページ。
- 18) 前掲17), 390~391。
- 19) 文政十二己丑年「要用記 (田中玄蕃)」の五月五日条には、「今夜清水於松濤庵発句合、衆儀評■養の由」(■は判読不能)とある。
- 20) 前掲17), 120~129。
- 21) 前掲17), 19~27。
- 22) 前掲17), 32ページ。
- 23) 前掲5), 893ページ。
- 24) 前掲5), 888ページ。
- 25) 前掲5), 885~886。
- 26) ①岩上芳外 (1913):『銚子案内』, 嘉瀬喜衛。②前掲16), 625~629。
- 27) 前掲16), 636ページ。
- 28) 雨谷茂民 (1940):『銚子商工案内』, 銚子商工会議所。
- 29) ヤマサ醤油株式会社編・発行 (1977):『ヤマサ醤油店史』, 181~183。
- 30) 銚子木国会編・発行 (2002復刻):『銚子木国会史』, 1ページ。
- 31) 永澤謹吾氏のご教示による。
- 32) 前掲16), 850~851。
- 33) 永澤謹吾氏のご教示によれば、この石碑は、最初は妙見道という地に建立されたが、旧銚子町の中央小学校幼稚園の建設を機に、昭和2年 (1927) に妙福寺に移転された。
- 34) 前掲30), はしがき。
- 35) 前掲30), 45~47。
- 36) 前掲16), ②, 634~639。
- 37) 井橋晤郎氏のご教示による。
- 38) 前掲15)。
- 39) ①前掲15)。②前掲16), 887~895。③大新旅館では、第二次世界大戦の空襲によって、これらの人物の来泊を示す芳名録が焼失してしまっている。そのため、大内綾子氏のご教示による。
- 40) 佐賀純一 (1995):『霞ヶ浦風土記ー風と波に生きた人々』, 常陽新聞社, 357ページ。
- 41) 前掲16), 891~893によれば、吉田弦二郎の『わが旅の記』の所収の「犬吠崎紀行」にこのような記述がある。
- 42) 大内綾子氏のご教示による。
- 43) 松井簡治 (1938):逸話のない上田萬年博士, 国漢 (上田萬年博士追懷号), 1~2, 富山書房。前掲30), 28ページ。
- 44) 外岡松五郎 (1970):『銚子回顧』, 信太書店, 28~29。
- 45) 前掲16), 708ページ。
- 46) 井上貴智・佐久間智規・服部浩明 (2005):銚子市興野地区における商業的發展, 歴史地理学実習報告, 8, 47ページ。
- 47) 千葉県都市部編・発行 (1980):『銚子戦災復興誌』, 4ページ。
- 48) 前掲46), 47ページ。
- 49) 前掲46), 52ページ。
- 50) 三田漕艇倶楽部百周年事業委員会 (1989):『百年のあゆみ』, 慶応義塾体育会端艇部三田漕艇倶楽部, 395~396。
- 51) 前掲50), 120~121。
- 52) 前掲44), 28~29。